

教師の誠実さ

私の中学時代の恩師佐藤先生がこういうことを言っていたことがあります。

「そろそろ俺も転勤しようかな？」

私はその先生のことをたいへん尊敬していたので、びっくりして尋ねました。

「先生この学校で何か嫌なことでもあるのですか？」

「いやいやそういう訳じゃないよ。ただね長くいるとね、だんだん偉そうなことをいったり、自分のルールをまわりに押しつかけたり。自分の都合でルールを変えようとしたりするんだよ」

私は、この言葉でこの先生がますます好きになりました。なんと、自分に厳しい人なんだろう、と。

私は苦小で長くなり、この言葉の意味をかみしめています。

私は詩の暗唱を、子どもたちに課します。

あるとき、ふと自分が覚えられない詩を暗唱させるのは間違っているのではないか、と思いました。

それからは、自分で暗唱してから子どもたちに与えるようにしています。

できもしないことを子どもに課することはどうもおかしいと思ったわけです。

子どもたちに日記を書かせ始めた頃の話です。

私は、子どもたちだけに毎日書くことを強制して、自分が文章を書きもしないというのはどうもおかしいような気がしていました。

そこで、私はほぼ毎日学級通信を書こうと心に決めたのです。

体がきつくて書けないなあと思うときは、「子どもは毎日書いている」とつぶやいて何とか書きました。

駄文ではありますが、ここ7、8年は大体200号前後書いているはずです。

そのようにすることに何の意味があるかということ、子どもの立場に立てると言うことです。つらい思いや自分に負けそうなときの気持ちが分かると言うことです。

掃除をしない子どもに指導する前に、教師は懸命に子どもと掃除をしたか？

勉強せよという前に、教師は学んでいるか？

読書を勧める前に、教師は読書しているか？

忘れ物の多い子に指導する前に、教師は忘れ物をしていないか？

(私は学校に来てから家に取りに帰ることが月に1度くらいあります。先日交通安全指導を忘れました)

提出物の期限を守らない子を指導する前に、教師は提出物の期限を守っているか？

(私は教頭先生にご迷惑をかけています)

どうして絵が描けないんだろうと思う前に、教師は描いてみたか？

どうして歌わないんだろうと思う前に、教師は歌えているのか？

このように我が身に返してみると、子どもへの指導がかわってくるように思います。

そして、なにより子どもを愛おしく思えるようになります。

何度注意してもできない子に、なんだか愛情がわくようになります。